

第44回 AJG 研究会 「コミュニティを越えていく“しかけ”づくり」

2008年以降、「留学生30万人計画」という政府主導の政策が展開され、現在日本国内の大学には多くの留学生が在籍しています。しかし、せっかく日本に来ているのに「留学生」の枠を越える機会が少なく、周囲から「お客さん」としての認識を持たれている、あるいは自身でそう捉えているケースが少なくないようです。そのようなことから、なかなか日本人と、あるいは日本社会に生きる人たちと接する機会が持てないとの声を耳にします。また、日本語教師はとかく教室内での言語学習に注目しがちです。しかし、留学生が日本語学習の中で参加していくコミュニティとは、教室内の同じような日本語学習者メンバーとのコミュニティに限らず、教室外のより広い環境での多様な人々と関わり合うコミュニティでもあり、そうした人たちとの相互行為を営みながら日本語学習者としてのアイデンティティを更新していくものと考えられます。また、こうした考えに基づく日本語教育実践研究も現在大きく展開しております。例えば、留学生と日本人学生が単なる一時的な「交流」に終わらないプロジェクト型授業に参加し継続的に協力し合いながら、双方の学生たちは互いの差異に気づき、また自身の価値観を新しくしていくという教室実践の報告がいくつかあります。こうした試みは「共修」、「共学」といった言葉で近年注目され、新たな可能性を広げています。

今回お迎えする杉原由美先生（慶應義塾大学）、島崎薫先生（東北大学）には、こうした「留学生」の枠を越え、また固定化されたコミュニティを越えていくために必要なしかけをどのように準備するかについて、具体例を交えてお話していただきます。こうしたお話をもとにして、参加者間で、多様な文化的背景を持つ学習者たちが共に学ぶ「共修」の可能性について考えていけたらと思います。

講師紹介

杉原由美氏（慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス 総合政策学部准教授）

専門分野は、日本語教育学、多文化教育、エスノメソドロジー・会話分析。多様な言語・文化背景をもつ者同士が、日本語を使う環境でどのようにコミュニケーションをしながらよりよく共存していけるか、実践と研究を通じて追究している。主な業績として、『日本語学習のエスノメソドロジー — 言語的共生化の過程分析』（2010年、勁草書房）、「日本型多文化共生社会に向けた学びのデザイン—カリキュラムマネジメントの視点から—」（共著）『異文化間教育』44（2016年）など。

島崎薫氏（東北大学 高度教養教育・学生支援機構高等教育開発部門国際化教育開発室 講師）

専門分野は、日本語教育、留学生教育。学習環境デザイン、言語学習者のアイデンティティ、社会文化アプローチから見た日本語教育、特に実践コミュニティやコミュニティ間の越境に興味がある。国際共修クラスで留学生とすずめ踊りを始めてもうすぐ4年だが、未だに踊れないのが悩み。主な業績として『実践コミュニティ』とは？：実践コミュニティの理論（共著）『外国語学習の実践コミュニティ：参加する学びを作るしかけ』（2017年、ココ出版）、「学生と学生をつなぐ：学生はどうつながり合い、そこからどう学んでいるのかを考える」『人とつながり、世界とつながる日本語教育』（2016年、くろしお出版）など。

会員によるポスター発表要旨

1. 「学部留学生の自律的学習能力向上支援—メタ認知活動を重視した日本語学習を通して—」

長谷川順子（九州大学大学院生）

本研究では、学部留学生への自律的学習能力向上のための日本語教育方法の探索を目的として、学習ストラテジーの意識的使用と内省活動の促進を図るメタ認知活動重視の授業を行い、学習者のセルフ・レポート及び教師のフィードバックをデータとして学習活動に関する学習者の認識を M-GTA の手法で分析した。本発表では、分析結果として自律的学習能力に必要なメタ認知の向上を示唆するカテゴリーが得られたことから実践方法の有効性について考察するとともに、メタ認知的知識のみならずメタ認知的行動の促進を図る方法の改善を今後の課題として報告する。

2. 「初中級レベルにおけるスピーチ活動の実践報告—学生の独話力向上を目指して—」

長松谷有紀（桜美林大学）

初中級レベルの学生が、一定の意味のまとまりのある発話（独話）を産出する口頭表現能力を身に付け、自ら行えるようになるのは容易ではない。そこで、学生が独話力向上のために必要だと考えていることを、3回のスピーチ実践の「ふりかえり」を通して SCAT の手法で分析した。本発表では、特に授業開始時と終了時に ACTFL-OPI 形式の独話を測るインタビューを実施し、レベル判定が初級から中級に上がった学生を対象に行った分析結果を報告する。

3. 「レポートと小論文における上級学習者の問題点—説得力を高める反論・反駁に注目して—」

山口恵子（桜美林大学）・鈴木秀明（目白大学）

上級レベルのレポート・小論文においては、適切な「問と答え（主張）」（山口・鈴木 2015）のもと、説得力を左右する要素となる適切な理由と客観的な証拠が必須であるが、さらに適切な反論・反駁も重要である。本稿では上級学習者が産出したレポート・小論文に見られる反論と反駁に焦点を当て、適切な反論とはどのようなものかを検討する。また、反論とそれに伴う反駁の如何によりレポート・小論文の説得力がいかに変化するかも考える。

4. 「やさしい日本語の諸相—短期日本語プログラムにおける日本人学生のレポートからの示唆」

牛窪隆太（関西学院大学日本語教育センター）

本発表は、短期日本語プログラムにおいて実施した留学生と日本人学生の交流授業を取り上げ、留学生・日本人学生双方にとって意義のある活動のデザインについて検討するものである。プログラムに参加した、ボランティアの日本人学生に対して、留学生と同様の活動を行う、クラスメイトとしての役割を求め、活動を通じて自分にとっての「やさしい日本語」を考えるという課題を課した。提出レポートにおける「やさしい日本語」についての記述を検討した結果、難から易という日本語の言語的な調整だけではなく、相手に合わせた言語使用や、方言についての言及、ピジン言語としての日本語など、自身の言語使用のあり方を、相手との関係において見直す契機が生まれていたことが見てきた。このことをふまえ、協調的相互行為の場における言語管理と言語意識教育の可能性について議論する。

5. 「社会とつながるプロジェクト-Capstone (卒論)コースの実践」

山口麻子 (テンプレ大学ジャパンキャンパス)

テンプレ大学ジャパンキャンパスでは、「日本語を使って社会に貢献できる人材の育成」を目指し、卒論コースで、8週間のプロジェクトを実施した。学生たちは関心を持つ社会問題に関わる NPO 等の団体の活動に週 1 回参加し、最後に発表を行い、約 4000 字の期末レポートを提出した。彼らは、この活動を通して様々なことに気付き、日本社会に自分が貢献していく道を見つけるきっかけを得た。本研究会では、社会問題を調査しながら、関連する団体で活動し、アカデミックライティングと発表に結び付ける実践として報告したい。

6. 「留学生の地域交流活動からの学び」

阿部祐子 (国際教養大学)

発表者は、留学生の実践的日本語、日本文化教育を目指して、教室活動を地域へとシフトした交流プログラムを行ってきた。今回は、継続的に同じメンバーが参加した 2 つのプログラムに焦点を当てる。一つは、日本人学生と留学生が地域サポーターとなるために参加した活動、もう一つは、自治体が地域国際化を目的に留学生を募集して行った活動である。両者の特徴を比較すると共に、参加者の学びと活動デザインについて考察する。

7. 「複言語で育つ高校生/大学生をめぐる高大接続 - アカデミック・ジャパニーズから考える」

武一美 (早稲田大学、NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ)

近年、日本人学生への初年次教育やリメディアル教育の必要性が増し高大接続についても言及されることが多い。しかしながら、日本国内の高校を経て大学に進学した複言語環境の大学生の存在は大学関係者の視野に入りにくい。そこで、彼等の中学から高校への進学、高校における日本語と教科における支援教育、大学進学、までを概観し、複言語で育つ高校生/大学生をめぐる高大接続についてアカデミック・ジャパニーズの視点から考えてみたい。

8. 「学習者とともにつくる実践の「ともにつくる」とはなにか」

伊藤奈津美 (早稲田大学)・江原美恵子 (早稲田大学)・小笠恵美子 (東海大学)・

神村初美 (東京福祉大学)・鈴木綾乃 (横浜市立大学)・中尾桂子 (大妻女子大学短期大学部)

言語教育では、学習者主体性、参加者対等性を志向する立場から、授業は教師と学習者がともにつくるものだという認識がある。この共通認識を軸に展開した「漢字・語彙」「日本事情」「個人授業」「就労支援」「介護の日本語教師研修」での「ともにつくる」とは何であったかを考察した。結果、①授業の流れに、学習者主体の「余白」を「しかけ」として盛り込むこと、②「しかけ」は授業目的と理念から決まるという共通項が見られた。

9. 「母語による意見文の日中比較—パラグラフ構成を中心に—」

大野早苗（順天堂大学）・莊巖（秀明大学）・羅曉紅（暨南大学）

本研究は、日中の大学生（主に1年生）がそれぞれの母語で書いた意見文から、彼らが文章に説得力を持たせるために何をどのように書けばよいと考えているかを明らかにしようとするものである。発表では、まず、パラグラフの構成に注目し、展開部がどのように中心文と関わるかを分析した結果、日本の大学生は社会一般に見られる事例や個人的体験を述べて中心文の記述を一般化しようとする傾向があり、中国の大学生は故事や名句の引用による権威づけや叙情的描写による感情への訴えかけにより中心文の記述を強化しようとする傾向があることを指摘する。その上で、背景にある中等教育における表現指導のあり方を比較、検討したい。

10. 「初年次教育としての日本語表現科目においてピア・ラーニングはどのように捉えられていたのか—アンケート調査の自由記述に対する量的および質的分析から見てきたもの—」

トンプソン美恵子（早稲田大学）・大島弥生（東京海洋大学）・小笠恵美子（東京海洋大学）・大場理恵子（東京海洋大学）・河野礼実（お茶の水女子大学）

報告者らは、初年次教育としての日本語表現科目でピアでの議論・推敲を中心としたプロセスライティングの実践を行ってきた。本研究では、アンケート調査のうち、3ヵ年分（1ヵ年約300名）のピア・ラーニングに関する自由記述に着目し、受講生がピア・ラーニングをどのように捉えていたかを分析した。データを多角的に検証するため、テキストマイニングとコーディングの手法を採用した。当日の発表では、それぞれの手法から明らかになったことを報告し、実践時の留意点について示す。

以 上